

医療地災被災ぬ描

9/7 朝日

医師も機器も足りず

病院

被災から半年。医療機関は診療を再開するも、腫瘍は山積だ。医師不足が悩み、受診するのに不便な状態が続く。十分な医療やケアは、住民に届いていない。

年間600件近いお腫がある宮城県気仙沼市。お腫環境が厳しくなっている。「初めてのお腫です」

不安。でも他に行く所がないです」。同市のさん(28)は5日、市立病院を受診した。堤防が壊れた海沿いの道を運転し、車で片道30分かけて通う。年約350件あった市立病院でのお腫は、約250件を受けてきた市内の森産婦人科医院が震災でお腫を扱えなくなり1・5倍に増えた。常勤2人と応援の計3人で診るが、11月からは応援が週3日程度になる。

震災前、常勤の2人は月4日の休み以外は夜も常に呼び出しに働いた。2人が入る帝王切開手術の最中に別のお腫や緊急事態があれば、どちらかが抜けて対応した。宇賀神智久・産婦人科長(38)は「応援はあるが、常勤医2人で続けるのは苦しい。医師不足の根本的解決が必要」と話す。

一方、お腫の再開を目指す森医院の森良一(即院長)64の心は揺れる。「震災後、市外に出た人もいる。

お腫の需要がどの程度あるのか不安」と話す。

CTなし 検査に影

岩手県大曲町唯一の病院、県立大曲病院は津波で全壊した。6月末、現在のプレハブの仮設診療所を開いたが、医療機器の多くが流され、以前と同じ検査ができない。中でも、短時間で骨や臓器を画像化でき、脳卒中や脳障害、肺がんなどの病気がわかるコンピュータ断層撮影(CT)装置の不在は大きい。

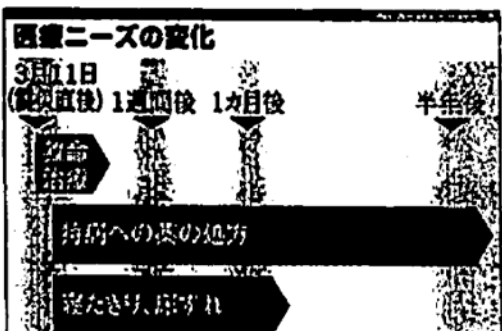
「頭痛を訴える患者に頭痛薬を出すだけで帰してよいか。クモ膜下出血が隠れているかもしれない」。医師は言う。CTを受けるには、隣の市にある県立釜石病院まで行かねばならない。地元出身で、医療支援団体のさんは「地元でCTの診断ができる」と、安心感が全然違う」という。

県医療局によると、大曲を含め全壊した県立3病院へCTを再配備する予定は今のところない。国の補助は、建物の建設費を含め。

が、今は病院内で運搬してもらえない」と話す。

行き場ない患者も

被害が小さかった医療機関や介護施設に患者が集中する中、行き場のない人も目立ってきた。宮城県女川町立病院によると、一人暮らしの80代女性が6月、脱水症状になり受診した。3日前から食事をしていなかったという。不便な場所の仮設住宅に



被災地の医療

震災直後、避難所では糖尿病など病気があった患者への薬の処方求められた。寝たきりになるお年寄りも目立ち、未だ十分なケア